

故郷



366



楠本 昌彦 (52)

白浜町出身

(国立がん研究センター中央病院 副科長)

福島第1原発の事故で、放射線の健康被害に対する関心が高まっています。放射線の影響については報道されない日はありません。それも政府機関の発表、マスメディアの報道、専門家の意見、風評に近いものまでさまざまです。

私の専門は放射線医学で、その中でもX線という



放射線を少しだけ照射して体の中の病気を探る放射線

放射線被曝と放射線医学

診断です。放射線医学のもうひとつの柱は放射線治療といい、こちらはよりたくさん放射線を照射して、がんを治すことを目的とするものです。放射線医学を専門とする医師の大部分はこのどちらかの領域に属していることが多く、今回のような放射線被曝(ひばく)

による人体への影響を専門とする医師はごく少数です。

したがって、今回の事故による健康への影響について私が詳しく答えられるか、といったそうではあり

ません。診療の中では、この人はがんかもしれない、あるいはがんの患者さんで正しく診断して治療しなければならぬ、と考えています。その患者さんの何十年か先に起こるかもしれない「X線被曝による発がんの危険性」などは考慮に入れてはいられません。一般に週刊誌などは危険や不安をおおりに立てる方向に走りがちで、政府機関は「直ちに健康への被害はない」と不安を抑えようとする発表が多く、専門家と称する人たちによる意見にもばらつきを感じられます。

国民は何を信じてよいか、分からないままではないでしょうか。そうすると極端に敵しい方に対応する人や、反対に少々ややくそな気持ちで楽観的になったりする人が出てきます。

放射線の量は測定可能で数字で表すことができるのですが、その人体への影響については簡単には述べることができません。そもそも放射線の人体への影響の中でも、これ以上の量なら危険で、これ以下なら大丈夫

夫という線引きの難しい悪影響があります。さらにそれが100μSvという低い量以下なら、その悪影響自体についてもよく分かっています。

それでも分かりやすくするために無理やり線引きをしなければならぬことがあり、基準値を設定するこ

とになります。したがってその基準値ができて、それ以下なら絶対に大丈夫で、それ以上は危険である、というわけでもないのです。ここに低い放射線被曝の人体への影響を考えると、きの難しさがあります。

放射線被曝はできる限り減らすことが大切です。しかし少し放射線を浴びたからといって健康に影響が出ることはまずありません。ただこのように、もっと健康に害のあることは身の回りにたくさんあります。今回の出来事で、わが国は平時よりもわずかに放射線の影響を受けやすい環境にあります。この状況でも「根拠ある楽観」の中で、風評や思い込みに振り回されずに生活していきたいものです。

協力 南紀人材
交流センター